

みんなで人権^{じんけん}を考える「つなぐ」 TUNAGU II

そのだ ひさこ

「TUNAGU II」とは

人と人、心と心をつなぐ、世界とつなぐ—人権尊重のまちづくりの一環として、さまざまな人権問題について市民の皆さんと共に考えます。

命^{いのち}あふれる想い^{おも}

今夏、ある日曜日のNHKのテレビ番組「日曜美術館」を見た。映像の懐かしいお顔に釘づけになった。20数年前に亡くなられたが、世界的に有名な丸木位里さんと丸木俊さんである。私の絵本『いのちの花』（被差別部落の伝承の絵本化）の出版は2001年であるが、当時、墨で風格ある題字を書いてくださったのが伊里さん、全15場面にわたる命あふれるような絵を描いてくださったのが俊さんである。ちなみに、お二人は生前20冊の絵本を描いていて、私の『いのちの花』は80代のときの作品で、老眼鏡に虫メガネを持って描いてくださった最後の絵本である。

テレビには「沖縄戦の図」を描いているお二人の姿が映し出されている。沖縄に住みこみ、庭に敷いた巨大なシートの上に、和紙を広げ、その上でお二人が、あちちとこっちから、立ったまま絵筆をふるっていた。「沖縄戦の図」は1984年に描かれた400センチメートル×850センチメートルの巨大な絵である。他に、「久米島の虐殺」(1)(2)、「チビチリガマ」読谷村三部作など膨大な絵が沖縄の佐喜真(さきま)美術館に常設展示されている。膨大な沖縄戦関係の本を読み、現地を訪ね歩き、生存者の話につぶさに耳を傾けながら、日本の戦争の唯一の地上戦のさまを描き残してくださった貴重なもの(財産)である。

広島の原爆投下で家や親族を失い、投下の3日後から夫婦で広島に入り、けが人を運び、死んだ人を焼き、食べ物を探してさまよい、屍(しかばね)のにおいと蠅(ハエ)やうじのなかを被爆者とともに歩いたお二人。その3年後、15テーマに及ぶ『原爆の図』を二人で描きはじめてのである。一発の爆弾が一瞬に、一生かかっても決して描ききれない人々の命を奪ったというまぎれもない事実。唯一の被爆国である日本のこの絵は世界各国をまわることとなった。

最後に描いてくださった私の絵本の、5人の若者が殺された場面の俊さんの絵は、まるで極楽浄土を彷彿(ほうふつ)とさせるような絵になっている。それは、生涯、死(体)を見つめ続け、命(命の大切さ)を見つめ続けてきた俊さんだからと思わずにはいられない。

10月21日「国際反戦デー」
に考える

丸木夫妻は、戦争や公害などで苦しんだ人々の生の姿を絵画で残されています。戦後76年が過ぎ、戦争を体験した方々も少なくなっている現在、これらの絵画は一層貴重なものになっています。

学校でも、戦争や平和、環境問題について、国語や社会、そして道徳などで学習しています。それらの結果、次のような標語が生み出されています。

「平和主義 習ったことは 広げるぞ」

「核排除、日本がやらなきゃ 誰がやる」

「平和への 思いつながる 千羽鶴」

平和な社会をつくるため、学校での学びも貴重な財産となっています。

筑紫野市人権尊重の
まちづくりスローガン

自分が人からされたり、
言われたりして、
いやなことは、
自分は人にしない、言わない

平成29年度筑紫野市総合教育会議にて、子どもにも大人にも理解でき、実践に移せるスローガンとして決議されました。